

「語りつぐ36災害」

体験者インタビュー集

大西山崩壊と大鹿村の復興

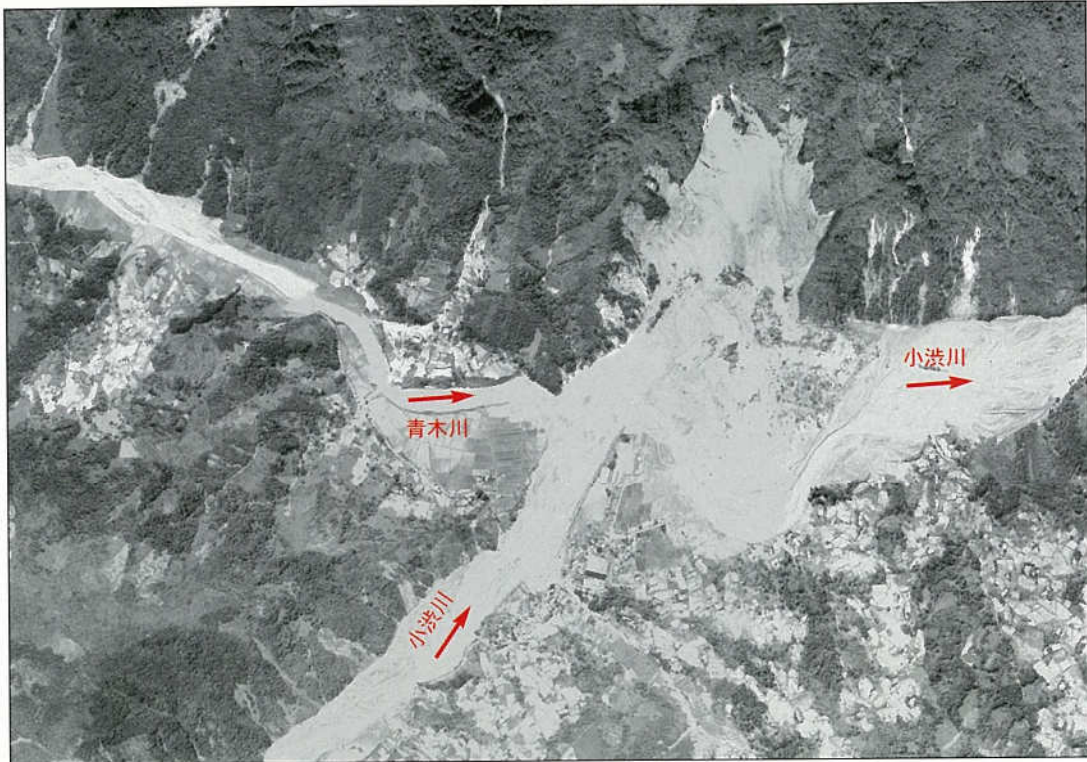
～ 伊那谷「36災害」から45周年

その経験を次の世代に伝承し、未来の安全と安心につなぐために ～



36 災害での大西山崩壊時と現在の航空写真による比較

(大西山の崩壊により集落が飲み込まれ、小渋川は大きく右岸側へ湾曲している。)



36 災害被災時



平成 15 年 9 月

「大西山崩壊と大鹿村の復興」

目 次

I. 本書の作成にあたって	
1. 目的	2
2. インタビューに応じていただいた方々	2
3. 本書のまとめ方	3
II. 大西山の崩壊と大鹿村の復興	
1. 大西山が崩壊する前	4
2. 大西山崩壊・その時	7
3. 大西山の崩壊直後	11
4. 大西山・小渋川の復旧が進む	16
5. 大西山に桜を	26
(巻末資料)	
1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」.....	31
2) 参考資料一覧	57

あとがき

表紙写真 上：大西山崩壊直後の崩壊したがれきの上から見た大河原地区の惨状。

下：ほぼ同じ箇所から見た現在の大河原地区。

【崩壊がれきに植えられたサクラ(手前)、新大鹿小学校や、大きく付替えられて河道改修された小渋川(正面)など、被災時の面影は見当たらない。】

I. 本書の作成にあたって

1. 目的

本書は、昭和36年6月29日に一瞬にして42名の方々が亡くなった、大西山の大崩壊から今日に至るまでの様々な貴重な体験を、後世に伝承することを目的に、体験者インタビュー集「大西山崩壊と大鹿村の復興」としてとりまとめたものです。

インタビューは平成17(2005)年度に行いました。

2. インタビューに応じていただいた方々

今井 邦康 さん

自宅出勤準備中にふと外を見て大西山の崩れを知る。子どもを連れて、あわてて避難した。郵便局に長い間勤務。大西公園の桜の植林に尽力し、現在大鹿村桜の会副会長を務める。



今井 積 さん

買い物から帰宅途中、大西山の崩壊と家の被災を目撃し、田んぼの中を逃げ助かる。36災害前は小学校の教諭を務め、被災後は保育園に勤務。健康が一番と大鹿の子どもたちの健康に留意してきた。



小野 貞次 さん

大河原で洋服店を営む。供養のために桜の植樹を始める。多くの方の協力で見事な公園に。(財)日本桜の会評議員、大鹿村桜の会会長。



倉田 重光 さん

倉田商店店主。趣味の8mmカメラや写真撮影の記録が、現在に災害を伝える資料となっている。



筒井 清一 さん

一度目の崩れから大西山を注視。被災・殉職した建設省職員の動向も直視。36 災害前に筒井輪店を開業。災害により壊滅するが、再興し現在に至る。



野牧 勲 さん

黒部第四ダムの工事現場勤務中に36 災害が発生。ブルドーザーを運び、大鹿村での河川掘削などに従事。その後も大鹿に住む。山形県出身。



御堂島 識 さん

36 災害では青木川沿いの自宅が裏の沢からの土石流で被災。営林署小渋川治山事業所にて村内の治山事業に従事した。現在は松川町に在住。



宮下 寛夫 さん (大鹿村前村長)

昭和 36 年の災害直後から役場に勤務し、災害復興に尽力した。



3. 本書のまとめ方

歴史記録資料とするため、インタビューの内容は極力そのまま掲載し、末尾に本人のお名前を記載しました。

また、見出しはインタビューの内容から編集者により記載しました。

Ⅱ. 大西山の崩壊と大鹿村の復興

1. 大西山が崩壊する前

大西山崩壊以前の小渋川は、大西山の山裾の岩場をなめるように流れていた。今、向こうに土砂の崩壊した岩が積んでいますけども、(大西公園付近)ほとんど左右の岩盤は昔のままですから、あの岩場を小渋川が水をなめてとおるように、一番向こうを流れておりました。(筒井 清一さん:インタビュー10月収録)



大西山が崩れる前。田んぼで川が山裾に押されていった

山奥だけど平和でにぎやかだった、あの頃の村の生活

・山の中でも結構いろんな設備があったり、そのころはまだ人口も4,000人くらいあったかな。村はにぎやかで、小学校と中学校が鹿塩と大河原と両方にあった。保育園も両方にあり、大河原の方だけでも120人くらい子供がいる時もありました。とてもにぎやかで平和でいい村でした。(今井 積さん:11/3収録)



大鹿村大河原の中心街(被災前)



島河原と呼ばれた地区
田んぼの代掻きが行われている

よく川に入って遊んだ、冷たい小渋川

- ・いまと違ってプールというものはなかったので、よく川で遊んだのですが、(中略)小渋は急流でありまして、川の流れが速くて泳いでいると寒くって冷たかった。(小渋と青木の川の温度がちがって)青木の川へ行って温まっては泳いでいた。(筒井 清一さん:インタビュー10月収録)



昭和34年に開通した小渋橋



バスが到着して、村人が町から戻る



小渋川(左)、青木川(右)の合流点。小渋川はかなりの川幅があった

当時の村ではカラマツがよく植えられていた

- ・植林を行政で指導して、カラマツばかり植えましてね。その時代が36年前からです。(御堂島 識さん:3/7収録)

大西山崩壊前日までもたくさんの水害が

- ・青木の（岩本）じゅんちゃんの家が大西山の落ちる前の日に全部流された。そこでここへ（今井家）来ていた。飼っていた牛が流されたが、すぐ近くの川原（土砂の中）で生きていた。（今井 積さん：11/3 収録）
- ・36年6月の伊那谷は、梅雨前線で集中豪雨でした。数日前から大雨が降り、水害があり、大鹿も全村大水害がありました。（筒井 清一さん：インタビュー10月収録）
- ・そのとき青年団をやっております、友達3、4人くらいで、すごい水害だ。ということで、ここからは道路が通常にありまして、鹿塩の中心部につきましたら、完全に川原となっております。歩いて行きました。（筒井 清一さん：インタビュー10月収録）
- ・（27日に）この梅の木（沢）で2～3人。落合へ来る途中なんですわ。ここでも子供さんを入れて3人だか4人亡くなっていますよ。（御堂島 識さん：3/7 収録）

崩壊の前日の夜、

文満のお宮に避難していた

- ・前日までは、下のお隣の部落も反対側の東側の山が軟弱であったので、その辺の沢が押し出してくるということで、家庭によっては文満の松平神社を避難所として避難していた。（筒井 清一さん：インタビュー10月収録）
- ・前の夜には東側のほうの山が落ちてくるので危ないから避難するようにということで、高台の神社へ避難した。主人は勤めにいって留守で、子供を連れてそこへ避難していました。（今井 積さん：インタビュー10月収録）



大西山が崩れる前の晩、
今井さんが避難していた松平神社

崩れるのが普通だったから大丈夫と思っていた大西山

- ・大西山については昔から雨降りナギ、雨が降るときはガラガラくんどる（＝崩れる）のが通常でありました。それに私どもの住宅からは1Km以上は離れていたもので恐怖感というのはありませんでした。（筒井 清一さん：インタビュー10月収録）

2. 大西山崩壊・その時



大西山崩壊の瞬間

あの朝、

みんなが平和な朝が来たと思っていた

- ・家庭によっては文満の松平神社を避難所として避難していた。安全だということで28日に帰ってきて体を休めていた人が被害にあったと聞いています。うちのお隣も亡くなった方がいます。(筒井 清一さん：インタビュー10月収録)



文満地区の国道152号。
田んぼは道路面より低かった

大西山、一度目の崩壊

- ・29日の朝に大鹿村の緊急議会がありました。出かける時間だったので8時過ぎだったと思います。突然、大西山の赤い土が落ちてきて、一角が落ちました。今、なだらかに積もっているところが大きく崩壊しました。(中略)私もたまたま家の裏から様子を見ていました。(筒井 清一さん：インタビュー10月収録)
- ・私はちょうど主人が帰ってきて、子供が2人いましたので、主人に家にいてくれるようお願いして、石油が終わりになりそうで、もう何日も前から道路が通れなくなっておって、物資とかいろいろなものが不足しがちになっていたの、石油などを買っておこうと思って農協まで行きました。農協で石油を買ったりして坂道を降りてきたら、すごい音がしたので見たら、そのとき山が一回落ちたような気がします。(今井 積さん：インタビュー10月収録)

9時15分、大西山の大崩壊が起きた

- ・29日には、この寺沢が出ちゃって、私の家は沢のすぐへりだったので、家の玄関の高さ1mまで水が入って、居間までずっと水がついたんです。子供やばあちゃんたちを隣のわら小屋みたいな所へ避難させておいて、自分でいろいろ手当て防災をして、一週間ぐらいそのわら小屋で寝てたんですよ。大西山の崩壊は、29日の9時10分か、15分くらいだったと思う。(御堂島 識さん:3/7収録)



大西山崩壊前日。
小渋川はかなり増水している

ゴーとすごい音がした。大西山が倒れるように崩れて来た

- ・ゴーとすごい音がしたので見ましたら、大西山がこっちへ倒れるようにして崩れるところでした。それですぐ危険だと思って、逃げるぞと2歳の男の子を抱いて、それから2年生の男の子と庭へ飛び出しました。(今井 邦康さん:11/3収録分)
- ・私はその時、農協に石油を買いに行っていました。そしてちょうど買って大西の山に向かって降りてきますと、すごい音がするので見てみますと、大西山が落ちてくるところでした。それが水の中に落ちて、しぶきが上がって、これは大変なことになったと思ったんですけど。(今井 積さん:11/3収録分)
- ・走って逃げる速さでは逃げ切れない速さ。(筒井 清一さん10月収録)



モヤが晴れ、全貌が分かり始める。

- ・子供たちもいたので心配だったので、(一度目の)崩壊後も家に向かって歩いていた。そうしたらちょうど議会の人たちが下からやってきて、危ないぞう、逃げろ逃げろ、ここからは行けないと言い、ああそうかと思いました。(中略)西側の山から落ちてくるので東の山際へ逃げればいいんだなと直感的に思いました。(今井 積さん:インタビュー10月収録)
- ・29日の朝は、ちょっとテラテラと日がさしたんですね。おばあちゃんが、1人で家へ行ってお茶を飲んで来るから、と言って行ったんですよ。子供と女房はわら小屋で朝ご飯を食べて。おばあちゃんだけが行って、行ったとたんにごォーと大きな音がして、大西山が崩れたんですよ。それはびっくりして、飛び出て見たところ、この真正面に見えた山がモクモクモクと。そのうちにチラッ、チラッと人が見えたんですよ。ちょうど私もまだ消防の団員でもあったんで、これはえらいことだとすぐに法被に着替えて飛んで行ったら、もう大西山の前はすごいもんでね。(御堂島 識さん:3/7収録)



崩壊当日の夕方。山裾を流れていた小渋川は対岸に押しやられている

崩れたあと、谷がモヤだけで真っ白だった

- ・崩れたのち、瞬間のあとだよ。その時にはモヤだけで。もう、モヤで真っ白で。小渋の谷いっぱいだった。それで、モヤがひけていくと同時にちらちらと人が見えた。まずは、音。(御堂島 識さん:3/7収録)

目の前で一瞬にして2人が山津波に呑まれた

- ・すごい形で落ちていましたので、私は兄弟が2人いるのですが、行って見るか?と話して見ていたら、そのうち大西山の全体がぐらぐらと動き出し、一部霧がかかった様に見えた。それから全体が動き出し、砕けて下へ突き刺した。動き出した途端に堤防にいた2人が手を上げて助けを求めて逃げている光景を見ていました。泥の津波みたいに高く盛り上がり押し寄せて来ました。彼らが一瞬にしていなくなるのを見て我に返り、外に逃げました。(筒井 清一さん:インタビュー10月収録)

雨靴もこうもり傘も、何もかも捨てて命からがら走った

- ・ 田んぼの水がいっぱいになっていて、足が取られてなかなか歩けなんで雨靴のボタンをやっとはずして捨てたり、持っていたこうもり（傘）も捨てて、振り向くとちようどそこには私たちの家も何にもなくて、農業倉庫の蔵の屋根だけが見えました。ああもう家が流されちゃったと思って、だったらこんな石油なんて持っていたってと、捨てて（中略）一生懸命逃げましたので、命が助かりました。（今井 積さん：11/3収録）



大河原中学校前の水田に広がった崩壊砂礫

2人の子を連れて山へ向かって必死に逃げた。上の子も助かってほっとした

- ・ これは危ないと思い、すぐに逃げないといけないと思った。2歳の子を抱いて2年生の子に逃げるぞと言って家を出た。はじめは前から来るから田んぼの向こうに逃げようと思ったが、道路に出てみると小学校がモヤの中に見えたので、山の上のほうは大丈夫だと思い、道がいいほうへ飛んで逃げた。そのとき波は田んぼの半分程まで家のほうへ向かっていた。白河屋のあたりで振り返ったら、家の前の増田さんは屋根よりも高く水が上がってた。だから私の家も同時に吹っ飛んだと思います。そこで私は助かったけど、2年生の子がついてきているか心配だったけど、ちゃんとしてきていて、皆助かったんだと思った。（今井 邦康さん：インタビュー10月収録）



崩壊土砂によって小渋川は対岸に押しやられ、対岸の山裾も削られている

3. 大西山の崩壊直後



崩壊瓦礫の上から、被災後の大河原中心街を見る

低いところが怖かった。高いところ高いところへと逃げて行った

・それから30分くらいかけて、一番高いところにある集会所に子供3人と逃げた。着いたら大勢の人たちが逃げておったし、血を流している人もいた。(中略)みんな直接被災した人ばかりではなかったけど、どこがだめなのか?ということが分からなくて、低い平らなところがみんな怖かったので、高いところ高いところへと逃げて来たのだった。(今井 積さん: インタビュー10月収録)



対岸から見た崩壊。集落の大半が流され、倉庫だけが残っている地区もある

決死隊を組んで救助に動き出す

・このあたりで人影が見えた。塩沢という兄弟と、あれは何ていう…奥さん。3人だか4人、助かったんだよね。ここはもう、淵になっちゃって。青木川を、筏を組んで、消防の決死隊が、これを渡って山を越えて、これを下りて。命綱を下ろして、助けを求めていた人たちをしょい上げて救助した。(御堂島 識さん: 3/7収録)



旧大河原小・中学校の周囲は上流からの土砂と、大西山の崩壊土で無惨な状態に

無惨な姿でたくさんの人たちが泥や石の中から出て来た

・田んぼの中で亡くなった方をみんなが探している。出てきた人を火葬場で焼こうと思ったが、新しく作ってあったレンガの火葬場が1人焼いたきりで終わってしまった。体育館の近所で焼いたがみんな濡れていて良く焼けなかった。(中略) だけど死骸もコロんと出るのではなくて、めちゃくちゃ傷んでいた。入れ歯が縦になって口が裂けていたり、背中に石がぶつかったり、死骸が傷んでいた。毎日死骸を焼いた。同じ組合の人も大勢亡くなった。でもお葬式も思うように出せなかった。死骸の出てきた人と探しても出てこない人もいた。(中略) 私はそのとき保育園の保母だった。保育園にいた子供が2人流された。1人はついに出てこなかったが、1人はおなかが腫れていたり、顔がいびつになっていたので信じられなかった。(今井 積さん: インタビュー10月収録)



農協の裏にあった、味噌工場。
大きな樽の影に逃げれば…と

・ええ。当日から毎日。桶谷の方までね。最後、小渋の天竜へ出る、今のプラントがありますよね。あのちょっと下の辺で1人収容したね。あとは天竜まで流された人がいて、あとで出たけども。桶谷の辺でも、カラスがおるから、きつといるぞ、と。それで、まだ水が多いし、命綱、腰縄をつけて行ったら、「おるぞー！」って。それであと2人ばかり行って、担架で担ぐんですけど、道はないし、桶谷から病院へ連れて行ったんだけどね。こう担いで、ここが頭だから、もう、臭くて臭くて。(御堂島 識さん: 3/7 収録)



小学校の体育館。土砂崩壊の爆風で穴が開いた

妹は結婚が決まっていた。指輪をはめて、準備してきれいにしてあげた

・(妹は)22歳だったかな。他の人はゴムヒモのもんぺをはいていたが妹はバンドもして乱れたところもなく、きちんとしていた。これから結婚することにもなっていた。なぜだか指輪を玄関に置いていった。結婚が決まっていた人は国土交通(建設)省の人で残念がっていた。指輪が残っていたのではめて、きれいにしてあげた。(今井 邦康さん:インタビュー10月収録)



土砂に屋根まで埋められた家

裸足の次男に赤い靴、もんぺも貸してもらった

・次男は裸足だった。今のように舗装はされていなく、石木の道だったので、裸足だと大変だからと、途中の道に靴が洗って干してあって、そこのおばさんが赤い靴だけど貸してくれた。男の子なので赤い靴は、と躊躇していたけどはかせた。子供を2人連れて靴を借りて、もんぺも何も泥だらけだったので、ちょうど干してあったもんぺもおばさんに借りてはいた。(今井 積さん:インタビュー10月収録)



行方不明者の捜索が始まる

一袋の飴いただきて涙する 我かつてひとにやさしかりしか

・心に深くしみたのは、山深く住む人々のやさしさでした。私はそれまでこの人達が市場で買い物をし、重い荷を汗をかいて背負って行くのを見ても、「休んでお茶一杯を」と申し上げたことはありませんでした。被災し無一文になった時、山の人達のあたたかい親切をいただき、感謝と悔いの涙が止まりませんでした。(今井 積さん: インタビュー 10月収録)



何とか流されなかった農協の倉庫も激しく破壊されている

ヘリコプターで運び出すほど大事だった繭

・ちょうど、養蚕の繭を出す時期になってたんで、(中略)。ヘリを要請して、ここでヘリポートを臨時に作って、消防が全部運び出しましたね。(御堂島 識さん: 3/7 収録)



土砂に埋まった建設省のトラック



孤島となった大鹿にヘリコプターによる救援が始まる



陸路も通行できるようになり、救援物資も届き始めた



建設大臣も被災6日後の7月5日に来村



西沢県知事の到着を待つ村民



土砂に埋められた田んぼ、住宅。
米軍のヘリコプターが飛来



36災害で大鹿村では55名の方が死亡・行方不明に。
合同葬儀（8月12日）

4. 大西山・小渋川の復旧が進む

被災後の大河原中心街。大西山の崩壊前に桐久保沢からの土砂が押し出し、付近の住民は避難していた



復興におきて、歩き出す

- ・災害後どこにも行ける状況ではなかったが、数日過ぎて郵便局の職員と、岩洞という峠を越えまして飯田へ出ました。飯田で一週間くらい友達と商売について相談をしたり、お世話になった人と話した。災害の一年前に開業したばかりだったので、いろいろ設備したものが壊れた。でも復興されるだろうということで、一週間くらいしてから戻りました。(筒井 清一さん:インタビュー10月収録)

治山事業も始まって行くが、何しろ手掛けるべき場所が多かった

- ・(治山事業は)36直後からは、北川。死者が出た北川の上流の方だった。さっきの寺沢も入れたしね。数が何しろ多過ぎちゃって、どこからどこまでというのは…。(御堂島 識さん:3/7収録)

治山の道路をつけようとして調べたけれどもひどかった

- ・釣堀の所。和合っていう部落から入れて、道路をつけようと、踏査したんですよ。大西山の頭に出るようにね。行ったら、今度は自分達が帰るにも帰れない程ひどい所でね。正面で見ただけでは、重機を入れれば簡単にできると思ったけど、そんなもんじゃなくて、結局やめてモノレールを計画したんですよ。(御堂島 識さん:3/7収録)

災害のことは入ったばかりのカラーテレビで知った

- ・6月にテレビで見て。カラーテレビがやっとあるかないかの時にカラーがあって、36災害を見て。黒部から出張でそこ（伊豆）へ行ってたわけよ。黒部は長野県の方の大町側におったもんですから、長野県で大きな災害が起きたから大至急帰って来いということだね。（野牧 勲さん：7/22収録）

道なき道を重機で進んでようやく着いた、大鹿村

- ・黒部から大町を通って、大町で貨車積みをして伊那北というところまで来て、そこで貨車から降ろして天竜川を自走で渡って、一回重機をトレーラーに積んで高遠というところまで来て、高遠の橋の上からいったんトレーラーから重機を降ろして、それで自走で長谷村を通って山道を越えて大鹿に入ってきたんですけどね。昔ですから道も狭いですし、それと車というものがなかったのが伊那北からここまで二日くらいかかって来た。途中は災害の跡ですので道がない。道がなかったものを無理して通ってきたものですからどうしても大変だった。（野牧 勲さん：インタビュー10月収録）



鹿塩小学校体育館に流れこんだ土砂（7月15日）

おばあさん達が水を止めてくれと必死の懇願。かわいそうだった

- ・分杭峠を通過して、一番最初の集落に来たときに（中略）民家があったんですけど、それがまるっきり川の中にあるんですよ。その民家の真ん中を川が流れとって、（中略）おばあさんたちがおって、家に流れている水をすぐに、この水を止めてくれ、ということだったんですけど。自分たちの機械も仕事をやる装備をつけていなかったもので、おばあさん申し訳ないんですけど、すぐ下へ行って装備をつけてから上がってくるで、それまで我慢してくれ、と言って。本当に泣きの涙で言われたことがあった。それが一番ここへ来て最初に会った人たち。かわいそうだったですよ。（野牧 勲さん：インタビュー10月収録）

あんな災害現場は初めてだった。とにかくみんなかわいそうだった

・大変な災害だと思ったね。自分たちも建設会社で黒部みたいな所にはおるけれども、災害であんな所に来たのは初めてだった。とにかくかわいそうだったな。おぼさんの所に行ってやりたかったな。村の人も、我々が来てから変わったな。よくしてくれたし。(野牧 勲さん:7/22 収録)

まるっきり石と砂、まるで賽^{さい}の河原だった

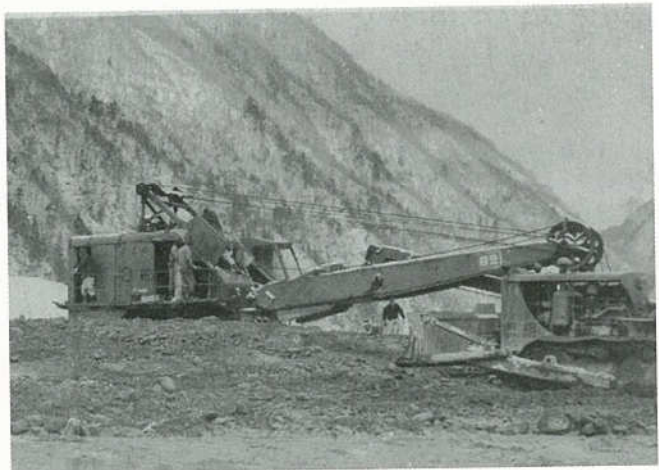
・北川からずっと河原を下がってきたんですけど、(大鹿村に入った時)すべて全部、賽の河原。石と砂しかない。そういう状態。だからこの辺もまるっきり河原、砂ばかりです。山と山の間が川というか砂、そういう状態なもので、その中に残った水がというか川が自由に流れとった。そういう状態の河原だった。(野牧 勲さん:インタビュー10月収録)

川の格好もなく、どこへ川を通そうかと、まだ全然決まっていなかった

・下原という所の元村長さんの所の橋のたもとから始めたんですよ。あそこに杭を打って、あそこから川を造って道を造って。あその上から来てる川もあって。ちょっと下の方から始めて、両方、川を広げようと。その時は川の格好もなく、どこへ川を通そうかと、まだ全然決まっていなかった。この辺はずっと平らだった。元の村長さんの所も何にもない河原の状態だった。両側へ押し上げて。雨が降るたびに、流れが変わった。ここから上は(家が)みんななくて。道路側はなくて。この辺もみんな川になっちゃってな。(野牧 勲さん:7/22 収録)

大鹿村の復興のため、色んな重機が入って来た

・一番最初に入ってきたのがパワーショベルというやつなんだけど、そのころでは日立製の一番大きいクラスの機械。ばらして入ってこないといけなかった。6個にばらして持ってきた。そこで組んだ。そしてこの川をずっと掘り進んだショベルが1台。付随したバックホーになる小さいのが2台。コンマイチ(バケットの容量0.1立米)とかコンマロク



崩壊土砂の除去作業には当時最大規模のクレーンやブルドーザーが導入された。

(バケット容量0.6立米)そういうものが入ってきた。一番大きなものが2立米というのがある。ひとすくいが2立米あるというからそれでここは終わった。(野牧 勲さん:インタビュー10月収録)

流路工には反対もあったけども川を直して行かなくてはいけなかった

- ・(自分が)村長になって、流路工整備について村民に説明した。流路工整備は、今の結果を見れば良いことであるが、当時説明するのは難しかった。村民からは賛否両論。田んぼが減るから嫌だ、学校・資料館を移転せねばならぬから嫌だ。国交省(建設省)で金出せ!と(宮下 寛夫さん:7/22収録)

一からの土木工事、昼も夜も働いて川の流れを造った

- ・何にもできていなかった。(一面土砂だったところに川を造るとき)真ん中から両端に分けて全部押し上げた。とにかく最初にくぼみを造り川の流れを造ろうということになった。36年の9月から始まって、重機は38年まで、護岸の石積みは40年くらいまでやっていた。



左右両岸に水制が施工され、川も落ち着いた様相を見せ始めた

(昼間の作業だけでは追

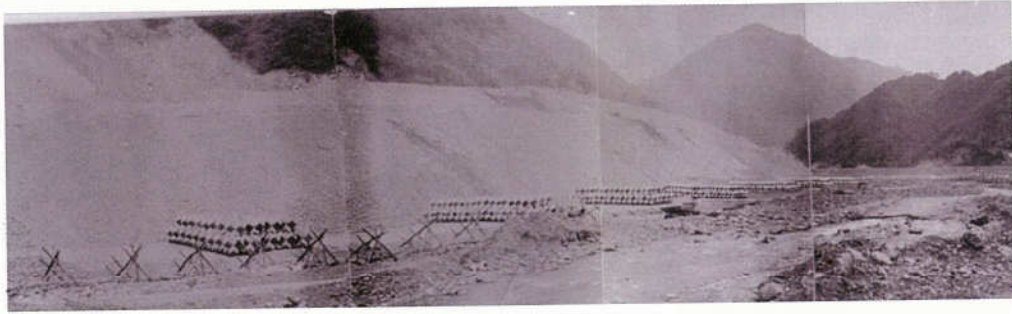
いつけなかった)ので我々のときは昼夜、祭日とかそういう日もなく働いた、当時は過酷な仕事でも平気でみんなやってくれた。(中略)一日二交代。6時から6時まで朝6時に交代。(野牧 勲さん:インタビュー10月収録)

夜勤の人は現場でそのまま寝込んでしまったりもした

- ・夜勤の人は、6時からの明るいうちと、午前中くらいに一生懸命やるんだ。夜の12時にご飯を食べるんですよ。食べて休みにすると、3時かそこらにみんな寝ちゃうんだよね。3時頃寝て、4時ごろ起こされて、明るくなってくる頃が一番眠いんだ。その頃の眠さは、今考えても恐ろしいくらいだけど。またそれが気持ちいいんだ。平気でブルドーザーでダーッと押し行っては停めて寝ると。5時半ごろかな。ヘタすりゃ代わりの人間に起こされたりということがあった。現場でそのまま寝込んでしまうんだ。(野牧 勲さん:7/22収録)

ああいう災害だったので、川も田んぼも同じ重機でやった

- ・田んぼを造ったり整地をしたりね。田んぼも最初は、何の気なしということはないんだけど、とにかく盛土しないとイケない、と。盛土して田んぼの形になるまでには、かなりの時間がかかるんだよね。(中略)今なら河川は河川、農地は農地で違う会社が入るけど。ああいう災害だったしな、同じ重機を使ってやった。(野牧 勲さん:7/22 収録)



崩壊土砂の脚が流れに洗われない様にコンクリートブロックの水制が施工された

たくさんの方が大鹿村の復興のためにやってきた

- ・飯場が、こっちはウチ(間組)と青木班と轟班と3飯(場)あったな。向こう側が江口に須藤班と。運搬会社では東京いすゞというのがあって。各班に30人から50人ずつくらいおったでなあ。300人以上はいたと思うよ。重機の技術屋と測量したりする土木屋さん、電気屋さんという風に分かれてたんですけど。重機を運転する人たちが一番多かった。(野牧 勲さん:7/22 収録)



復旧作業の多くの建設作業員のためのプレハブが立ち並び始めた

災害復興に来ていた人達の思い出のこと

- ・金稼ぎに来た人だつてないとは言えんけどな。ここに来れば仕事があるってんで。でも、みんな一生懸命は一生懸命だったな。当時は俺も若かったから、正月だ、お盆だ、という時は若い衆だけ残されるわな、やっぱり。単身赴任で来てる衆は帰っちゃったけど。妻帯者は、一週間に一回くらいは。妻帯者は半分もいなくて、3分の1くらいしかおらんのだ。あとはみんな独身だとか、近くに奥さんたちを連れて来てた。(野牧 勲さん:7/22 収録)

危ない作業もあったから、復興工事の事故で亡くなった人もいた

- ・土を高くあげちゃうので、そうすると肩(路肩)というか道路の肩と堤防の肩というか、(傾斜の違いもあり、もろく崩れやすいので)ここでも何人か重機の運転手が亡くなっていますね。(中略)今は昔の重機はないが、昔はオペレータというか技術を必要とした機械だった。危険なところをするには何年かの熟練というか、経験が必要だった。(野牧 勲さん:インタビュー10月収録)



工事がされていない川で雨が降ると、増水で工事の飯場が危うくなる

災害復興には多くの女の人もかかわっていた

- ・女の人もいたね。ああいう石を積むと、目地塗りってあるんですよ。コンクリートを詰めるわけ。足場を組んでコンクリートをペタペタ塗って。それから、きれいに掃除したり。(中略)ほうきを持って、コンクリートを持って、詰めながら掃除しながら仕上げていく。そういうことをしてきたわけだ。生コンを車で来てダーッとあげればいいという時代じゃないから、現場打ちで、男衆が入れるとか。セメントもダンプなんかで運ぶもんで、大島駅から袋に入ったセメントを男衆が運ぶんだけど、それを切って使えるようにするとか、女衆の仕事はたくさんあったね。女衆はたくさんいたと思うね。(野牧 勲さん:7/22収録)



川の形ができ、田んぼも整然とできた当時は工事関係者が約1,000人いた

地元の人と仕事をとおして仲良くなれた。嬉しかったなあ

・嬉しかったのは、地元の人が間組に入って手伝ってくれた。昔は自分たちの所に重機の見習いだとかで来てくれて、すぐに親しくなれたのはうれしかったな。今でも、俺が教えたと言ったら語弊があるが、俺んところについてくれた人が何人もいるわけだ。習うために。そういう人たちとは今でも続いているからな。そういうことは嬉しかったよな。(野牧 勲さん:7/22 収録)



崩壊土砂の一部を取り除き、川をある程度戻し、田んぼの造成が行われている

今でも当時を思い出したり、考えたりすることがある

・これだけになって（整備されて）良かったなという気はするけどな。最初に北川から入って、ずっと思い出があるわけだ。この道はこうだったなあ、ここを崩したことがあったなとか。しょっちゅう、そういうことを思いながら行ったり来たりしてるけどな。今でも一ヶ月に何回も北川に行ったり南側に来たりするからな。当時はこの仕事を一生懸命やらないかんという気持ちで。（一番頑張ったのは）自分たちじゃないな。仕事をしたのは外から来た土方の衆だろうけど、頑張ったといえば、村民の衆が支えてくれたんじゃないかな。北川で、あのおばさんたちが、家の中に入ってくる水を止めてくれというのは、おそらく一生忘れんと思うな。今でも思い出す。(野牧 勲さん:7/22 収録)

集団移住事業でたくさんの人達が大鹿を離れて行かざるを得なかった

移住先

愛知県瀬戸市……北入の方が主に移住した。開拓した土地は住宅地として売れた。

松川町

駒ヶ根市……北川の方々が主で、一番多く移住した。全体の半分くらい。大徳原という土地（広域農道沿い）。今ではきれいな住宅地。

伊那市

移住した地区 移住は集団で。でも行く先はバラバラ。

北 川……メインで当時 60 戸ほど
 北 入（北川の下流）
 奥 沢 井（塩川の上流）
 中 山（滝沢の上流）
 計 80 戸くらい集団移住した。

北川では年に一度特殊な神様を祭るため、集まっているらしい。

県が推進して農業地を買収、世帯数割で財産等も……。

移住先には農業開拓で入った。（宮下 寛夫さん：7/22 収録）

当時の大鹿村には山仕事があった

・植林……当時はカラマツがメイン。

下刈り・つる切り・除伐など、山仕事はあった。（宮下 寛夫さん：7/22 収録）

災害後は土木業が中心となって復興して来た

・土木が盛んになったのは 36 年の工事後。

大きな重機がたくさん入った。当時としてもかなり大きな重機だった。

間組、大豊建設……。

たくさんの支援物資が入ってきた。（宮下 寛夫さん：7/22 収録）

復興が進むと住民の気持ちが盛り上がって来た。復興に向けて立ち上がった

・重機が入ったら、住民の間に「これは何とかなるぞ」という想い、気持ちが出てきた。

土木で就労することが可能となり、水田がやられていてもお金の収入が得られるようになった。（宮下 寛夫さん：7/22 収録）

・復旧工事の音はうるさかったが、それよりも住民の気持ちが盛り上がってきた。「これならまた村ができる。やり直せる。」（村に）水田や、りっぱな農道も出来た。（宮下 寛夫さん：7/22 収録）



水も張られ、稲が植えられた

村を出ようかと思っていたけれども、大鹿村で頑張ってきた

- ・これはもう商売ができないなと思っていた。仕方ないので5日後には、松川へ土地を買うか、と出るとも思っていた。でも大鹿もまあ、なんとかかなるといって。ブルが来たりして工事が始まって人が来たので、また商売ができるかな、と言っていた。しばらくは果樹園をかっていたが、ほおっておいた。大勢の人たちが入ってきていたので、商売が成り立ったということです。(小野 貞次さん:インタビュー10月収録)

復興してきた大鹿村のあしあと

- ・あれだけの荒地が突貫工事というか、見たこともないような大きな重機で3年ほどで復興されて、それから復興最中にも村のものが頑張りましたと運動会をやった記憶がありますけど。そんな中でだんだんと耕地ができてきて、一度に田んぼができたわけではない。できたところから作付けをしていくという形で、見たとおりの水田に



田んぼに田植えが始まった

になりました。ただ、災害の復興が終わってから、大鹿村の林業がだいぶ衰退をしてみられましたので、だんだんと人口が少なくなってくるというのを心配しておりました。(筒井 清一さん:インタビュー10月収録)

大鹿は変わった、きれいに立ち直って変わった

- ・大鹿が変わったところは災害のときにいた人でないとわからないと思う。それはすごい変わり方。道も家も住んでいる人たちも変わった。新しくなった。大鹿と近隣の松川町へ行く道も変わった。大鹿もきれいに立ち直って変わった。(野牧 勲さん:インタビュー10月収録)

村の人達の気持ちがあったから、苦勞と思わずにやってこられたんだと思う

- ・村の人たちの交流、運動会とか野球大会とかお盆の盆踊りとかで村の人たちに触れた。災害を受けながら、あれだけのことができる気持ちを持って付き合っている。自分たちも感動したというか、村の人たちに吸い付けられた。(中略)村の人たちの気持ちがあって、工事をした人たちも苦勞を苦勞と思わずにやってこれたと思います。(野牧 勲さん:インタビュー10月収録)

復興の中で子育てしたり、みんな本当に大変だった

- ・道路が整備され、地元の人も雇用されて現金収入があって生活が潤ってきた。

住民も定着してきた。

現金収入を得られるとはいえ、子供を育てるといことは大変。

そのお金の工面・・・資産売却をしたり、苦勞をしたのだと思う。

(宮下 寛夫さん:7/22 収録)



稲の収穫

自分の地域は、自分で守るという気持ちが大切だ

- ・“自分の地域は自分で守る”ということ。土地柄が良い＝人柄が良いも含む(宮下 寛夫さん:7/22 収録)

長雨の時期になると今でも思い出す、当時の事を

- ・とにかく毎年、入梅の時期になって、長雨が続くと当時のことを思い出すし、今でも大雨が続くと崩落が続いていますので、いつも思い出したり、眠れない夜もあります。(中略)この頃は河川もよくなりましたので、大雨が続いても前ほどは聞こえませんが、当時はものすごく泥のにおいがしたり、川を大きな石がゴトゴトと流れる音がしました。それは今でも忘れません。(筒井 清一さん:インタビュー10月収録)

色々な苦勞をしてここまでになったことを伝えていかななくてはいけない

- ・大きな災害だったことを忘れてはいけない。伝えていかないといけない。ここで働いた人たちがいて、こういう風な苦勞をしてやっとここまでになったことを伝えないといけないような気がする。(野牧 勲さん:インタビュー10月収録)

5. 大西山に桜を

桜を植えようと思った。そしてまた村も発展するだろうと思った

・人が部落ごとに出て行ってしまった。ここはえらい災害でしたからね。(中略)どんどん見切りをつけて、出て行ってしまった。これではいけない、これだけの昔の伝統がある大鹿をなくすのか、という考えで、ヨシ、では桜を植えようと思った。そしてまた村も発展するだろうと思いました。供養が一番ですけども。自分は助かったけど、昨日



がれきの大西山山麓

までお客さんとして来ていた近所の主婦が亡くなったんで、なんとか供養してあげたいな、と思ったのが目的だった。二番目に村がさびれてはいけないなあと。まあ自分なりにボチボチとやった。(小野 貞次さん:インタビュー10月収録)

家一軒が60万だった時代に280万くらい、自分でもびっくりするよ

・大林建材にやってもらったけど、そういうやつはみんな金を払ってますよ。最初はしょうがないもんね。(中略)ブルドーザーでやったって、こんなものだったけどな。ああいう石だったから、ブルドーザーだって真っ平らにはならんでね。(入れたのは)赤土です。(中略)280万円くらい。(中略)当時は60万円あれば家が1軒建った。今考えればそんなもんで。(中略)今、受け取りを見るとびっくりしちゃうね。よくこれだけのお金を、どこから引っ張り出したんだと。砂を買ったり(桜の)苗木を買ったりしたんだからねえ。まあ、無我夢中というもんだねえ。(小野 貞次さん:7/10収録)

夜中の2時までかかって水やりをやってたよ

・(手間(暇)があったと言われたけれど)手間なんかねえさ。俺は夜中中やったんだもんで。ここの店をやって、おばあさんがまだいたもんで、6時から出て行っちゃ、やってきたんだもん。(中略)夏場は俺は2時頃まで(桜への)水やりをやってたんだ。(中略)軽トラへ桶を2つ積んで、下から、当時は道がないもんで、河原から汲んだんですよ。全部かけ終わると、大体夜中の2時だ。(中略)20回やそこらやらないかんでしょ。夏場は枯れちゃうからね。(小野 貞次さん:インタビュー10月収録)

供養のためにやるんだ。あまりにもかわいそうじゃあないか

- ・いやあ、言ったけどね。俺は供養のためにやるんだと。死んだと思えば何でもない
(中略) 田舎なもんで、朝晩で「こんにちは」「おやすみ」て言ってね。それが、バサーッとやられて亡くなったもんで、あまりにもかわいそうじゃないかねえ。だから自分としては、自分が死んだと思ってなんとかしてやらにゃなあ。そりゃもう、無我夢中ということだわなあ。(小野 貞次さん:7/10 収録)

3年前に死んだ家内、文句も言わずに本当にえらかった

- ・家内も、3年前に亡くなったけど、えらかったと思うよ。「お父さんが供養してやるんらしいよ。しょうがないよ。」というあきらめもあっただろう。「俺は死んだつもりでやるんだ」って言うから、しょうがなかったと思うな。(小野 貞次さん:7/22 収録)

少しずつ手伝う人が出て来てくれて、本当にうれしかった

- ・自分で植えたんですよ。最初は200本くらい。全部で1,200本くらい植えた。(中略)
(昭和)58年まで1人でやってた。16~17年ばかりか。今井さんがまだ郵便局に行ってる時だったで、辞めてくれて、同級生だもんで、手伝ってやろうってね。初めて手伝ってくれて。(中略) 手伝ってくれた人はみんな亡くなっちゃった。ここにもちょっと書いたけど、平多隆壽(ひらたたかじ)さんが一番最初に手伝ってくれたんだけど。今井さんより前だったね。その人が手伝ってくれて、本当にうれしかった。みんなきちがいだと言ってたけど。(小野 貞次さん:7/22 収録)

小野さん、そしてみんなが続いた

- ・あそこに植えてある桜は、小野貞次さんという人が先にたって初めたんですよ。そうしたらみんなが協力して、老人クラブの委員会とみんなが手伝ってくれて植えたんですよ。それであんなにきれいになった。初めのうちは石ばっかのようなところで、ガラガラしておったんですけど、土を入れたりし、(中略) あんなにきれいなところになって桜が見ることができます。(今井 邦康さん:11/3 収録)

花、木、砂、水、一輪車に載せてもって行った

- ・最初は桜ではなく、家にあるものを花でも木でも実のなるものなんでも持って行って植えました。でも石のガラクタのところだったので、砂を一輪車に乗せて水も持って行った。その頃はまだ道が悪かったけど、みんなそれぞれが持って行った。広くてどこへ植えてもよかった。はじめは花や木や大鹿のあらゆるものが植物園の

ようにあった。(中略)その頃、婦人会のおばあさんたちが桜を持ってきて植え始めた。(中略)村中の人たちの協力があった。そのうち村人たちがやっているから縁者の人たちもお金などを出してくれたりした。(中略)実際に遠い所の人たちも足でやって来た。当時は車もなく、村の人たちの真心のいっぱい詰まった公園だと思っています。(今井 積さん:インタビュー10月収録分)

桜の会やむつみ会と。でも苦労が多かった

- ・桜の会に入っていたのでよかった。最初の頃は20本くらい無償でもらった。自動車で帰りに積んできていた。家の畑に植えて植栽していたところ、むつみ会という方たちが桜をここへ植え始めた。しかし、土を1杯持ってきただけだった。もたなかった。(中略)やっぱり下がガラですから、これはダメだ、多少は砂があったのですが。業者からどんどん砂を入れてブルドーザーで平らにした。なかなかつかない、肥えた土地ではなかったので、やせていた土地なので苦労があった。(小野 貞次さん:インタビュー10月収録)

崩壊に植える為には色々と試行錯誤を重ねた

- ・ただ、問題は、あれだけの崩壊のガラガラのところへ桜が活着してくれるかどうか、成長するかどうかというのが、まず先決だったんですよ。それには、客土。そういうこともやりながら…(御堂島 識さん:3/7収録)



徐々に桜も増えてきた

雪植えの方法を発見してから桜がつくようになってきた

- ・その雪を利用した方法を発見したんです。試しにやってみようと思った。寒い日に雪を掻き分けて、土を掘って30cm植えた。100本植えたのが60本くらいついた。普通の植え方で1年目はつくけど2年目は枯れてしまう。(植栽をはじめて)4、5年目くらい(まで)、持ってきては枯れてしまう。4、5本しかつかない。これは何かあると思い、その研究をした。寒い日に雪を掘ってやるというのはどうかなど。みんなは馬鹿というかきちがいとか、雪のあるうちに植えることは喜ばしいことではない、世間では。自分が素人だったのでかえってよかったのではないのでしょうか。

(小野 貞次さん:インタビュー10月収録分)

- ・そうだよ。昔から植林は、氷を割って植えろっていうぐらいの、寒い、早いうちほどいいらしいけどね。そういう原理を、小野さんも人に聞いたりして、研究したんじゃないでしょうかね。(御堂島 識さん:3/7収録)



雪があるとき桜を植えると
根付くことを発見

故郷を忘れないようにって、中学生達も植えてくれた

- ・今は全部、日赤、学校はもちろん、中学の生徒はやはり故郷を忘れないように。大鹿で生まれて出世した方もいるけど、校長先生に頼みに行った。1人でやっても仕方ないというので、すぐに賛成してくれた。なので350本買ってきて、赤土も買って入れた。明日から手伝うんだということで、あくる日から、大河原学校と鹿塩学校の中学校先生に話してくれました。すぐに来てくれた。この下をずっと植えてくれた。(小野 貞次さん:インタビュー10月収録)



大鹿の中学生も参加

これからは年がら年中ひとを呼べるものが必要

- ・サルスベリを植えたんだ。夏場、桜ばかりじゃ寂しいかなと思ってね。100本植えたんだけどね。赤白と混ぜて。桜は今、3,000本越したかもしれないけどな。夏は、花火があるが。5月10日まではいいんですよ。八重が咲くからね。それからずっと寂しいじゃね。年がら年中何かあって、人を呼べるものを考えなきゃ。(小野 貞次さん:7/22収録)

大西公園、さくらの会、これからのこと

- ・跡継ぎは立派な方たちができましたので、そろそろ引退したい。今年、来年までやったら次へ交代したいと思っている。(中略)向こうの土手に240本植えたところがある。学校から文満の端まで植えたが、工事で切られた。将来はネットワークで全国に知らせて、やりたい。全国の人たちに来てもらう。こんな風に思っております。(小野 貞次さん:インタビュー10月収録)



村として桜の女王を選出するようになった



地面の芝も生えそろい、桜の公園として歩みはじめた

(巻末資料)

ドキュメント「36災害大西山崩壊」

36災害 気象・災害の状況／

行政・住民の対応 時系列一覧表

(巻末資料)

1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

36 災害 気象・災害の状況／行政・住民の対応 時系列一覧表

文末の数字は参考文献、イニシャルは体験者。どちらも57ページを参照。

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1532	天文元				水害あり。以降429年間に145回(3年に1回)③		
1554	天文23				水害、満足なる家なし③		
1584	天正12				地震、死者あり③		
1715	正徳5				天竜川「未の満水」、伊那谷にも水害あり③		
1719	享保4				「亥年の満水」。「未の満水」より大鹿村の被害大③		
1751	宝暦元				地震、1日3、40回に及ぶ③		
1845	弘化2				大河原の沢入り水害③		
1868	明治元				小渋川の本流、大河原に入る。「辰年の大水」③		
1882	明治15				大河原の沢入り水害③		
1891	明治24				濃尾大地震、大鹿村にも被害③		
1898	明治31				洪水、釜沢の湯が流れ死者③		
1910	明治43				大洪水のため、大山知事水害視察③		
昭和20 ～30年 代あたり					<ul style="list-style-type: none"> ・山地で造田のスペース無く、無理に広げたため、川を山岸の方へ押ししていた。(I・S) ・山は昔から、岩がむきだった。(I・S) ・軽い崩れは良くあり、家からそれを見ていた。(I・S) ・崩れ前、山は手を広げた観音様の形に見えた。(I・S) 	<ul style="list-style-type: none"> ・大西山から川に岩が落ちると沢となり、沢が出ると雨が止むと言いつづけていた。(I・S) ・祖母から、仙人の山だから人に被害を出さないと言われていた。(I・S) ・言い伝えより大きな崩れはないだろうといつも安心していた。(I・S) ・(今井) 積さんは国民学校の1期生。(T・S) 	

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
	昭和20 ～30年 代あたり				<ul style="list-style-type: none"> ・通りにもよく人が歩いていていた。(T・S) ・大西山の土砂が田んぼにあるのは、抑え盛土の考えもあったのかも知れない。(I・J) 		<ul style="list-style-type: none"> ・子供の頃は、よく岩から川へ飛び込んでいた。(T・S) ・私が商売を始めたとき、積さんの義理の妹のヨウコさんは建設省に勤めていて、出勤時にガラス戸で髪を直すのを楽しみにしていた。(T・S) ・当時建設省に3トントラックが3台あった。(T・S) ・高遠まで国鉄のバスが通って、鹿塩まで来た。鹿塩で東京新宿行き切符を買えた。(T・S)
1961	昭和36	6	20		この頃から本州に梅雨前線が停滞①		
			23		梅雨前線の停滞により、断続的に雨が降り始める。(I・S) 降雨量飯田測候所6/23～7/1の総量579mm、27日325mm② 23日から断続的に降り始めた雨は、台風6号の接近に伴い連続降雨となり、27日集中豪雨③		
			26	17:00	警報発令③	警報発令。消防団、分団毎に配置につく①	・26日北川集落で崩れがあった。(T・S)
			27	午後	非常体制。避難命令。事態加速度的に悪化① 大鹿村の雨量535mm④	大鹿村、災害対策本部設置。危険地帯へ緊急待避命令発令③	<ul style="list-style-type: none"> ・いろんな場所が崩れていて道が通れなくなり、お米や燃料などがなくなってきた。(I・S) ・36災害と言うけど、6/27の伊那谷は、梅雨前線による集中豪雨で郡下一円に被害。大半の被害はこの日まで、松川のあたり凄い災害。(T・S) ・あの天上がやられた。こっちからの土砂が貯まって、沢もどんどん貯まっていく。(T・S)
				?	北入、下平成一宅流失① 下平宅流失を最後に鹿塩地区連絡途絶①		
				13:00		北川地区、猛烈な雨に各家庭児童を迎えに分校に集まる①	<ul style="list-style-type: none"> ・北川集落は少し離れた集落なので、情報を得て大変、と思った。(M・H)
				13:30		北川地区、子供を連れ帰宅。本流堤防を越え始める①	

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和 36	6	27	14:00	西の寺沢押し出し、水防作業中の原春時・丸山富雄・松尾英一の3名を呑み込み、下平忍宅外数戸を破壊。県道に小山を築き、鹿塩川に流入① 鹿塩川鉄砲水公民館を突破、小椋元宅と東小花沢の橋梁撤去現場を襲う。小椋輝翁・伊東錦司・清水三郎3氏濁流に巻き込まれ、行方不明①	北川の状況視察に、役場の小塩、丸山が向かうも、黒川付近で車を捨て、第5分団詰所まで脱出①	・(鹿塩市場の救助活動では)水の勢いが尋常ではなく、若手の人が川の見回りに行って災害に見舞われ亡くなった。(M・H)
				15:30	鹿塩川、分校を襲う。味噌震橋で土砂つまり、木炭倉庫、松尾勝・前田要・松尾薫各氏宅埋没①		
				16:00	岩音橋流失。奔流堤防(昭和37年完成)を越え、中学校体育館に迫る① 鹿塩川筋、表山崩落。伊東錦司・中村正見宅破壊流失①		
				17:00		老人婦女子山に避難、木を拾い集めキャンプ。積立に32人、馬墓地に11人、柄山に21人、不動墓根に76人傘を差したまま朝を迎えた①	
				17:30	濁流鹿塩中学校体育館を突破、風月堂を洗う① 大葉沢氾濫、山口政喜代・酒井倉一・前田市恵宅埋没①		
				?	桃の平の針の木沢が押し出して小森数一宅流失①		
				18:00	北川地獄谷押し出し、下沢明広・斎藤正和宅危険。裏山土砂で北村明道宅埋没、原亀清宅一部破壊、大蔵みさえ宅危険①	付近の人、松澤義則・松澤格太郎宅に避難①	

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和	36	6	20:00	塩川急激に増水、塩湯付近道路壊滅。河合橋両岸浚われ、堀井明司・塩沢もと・沢口あきの3家と白木屋製材所流失① 19時10分頃、通電、警電、中電相次いで途絶③ 北川地区小椋義夫宅流失①		
				?	さらに梅の木沢崩落、荒谷新次郎宅一瞬に倒壊。荒谷母子、同家に避難中の駒瀬幸男一家4人、計6人死亡①		
				?	学校下の新井邦雄宅裏で堤防を越えた本流は市場通りに迫る①	塩川公会堂、市場神社、その付近の民家は避難民で一杯。農協、郵便局、治山事務所・担当区も避難①	
				20:30	本流により筒井秀雄宅流埋没①		
				23:30	桶谷の上甲忠義・原今朝男宅流失、被害拡大① 桶谷と交通・電話途絶、情報不明① 塩川の中山伯美宅付近の小沢の押し出しで危険。下流の平瀬皓宅へ土砂押し入り、万塩清志宅では子供は逃げたが清志は土砂に巻き込まれる① 鹿塩川、大沢実宅流失①		
				?	西の寺沢が轟音と共に流失。松尾幸久・北林仲恵・原春時・中平寿一・寺沢保・下平忍の4家を埋没させ、県道から水田へ山丘を築いた①		
				夜半	上ノ沢洪水。中西仁太郎・本間杉松宅埋没、桃平橋倒壊、洞口好孝宅に迫る① 文満地区森下一・下沢実夫外1戸が地すべりと土砂流出で倒壊埋没① 北川地区、小椋はるよ宅流失①	県警機動隊、非常招集で飯田市に集結③ 付近一帯の民家避難①	

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言	
1961	昭和36	6月27日	?	桐久保沢は刻々と増水。消防団必至の防災にかかわらず高橋竜文別宅は埋没倒壊の危機に瀕す①	上市場一帯は香松寺、前島家に避難①		
			?	鹿塩地区の状況は一層悪化。教員住宅2戸流失、羽生明別宅は倒壊寸前①	付近住民は公民館学校に避難①		
		28	0:00	濁流、決死で固めた水防線を突破、鹿塩農協利用部辺りから市場通りめがけ突入①	第5分団本部を始め、付近に残された人を口で救出①		
			?	奥沢井では黒川光雄・大蔵幸達・藤生五徳の3家が流失全壊、他の4家は危険①	情報一切不明		
		1	30	?	沢井分校では、27日～30日裏山から土砂流入。住宅・体育館・給食室埋没破壊、香林寺・池田純一宅まで被害及ぶ①		
				1:30	鹿塩川本流により大沢貢宅・分校流失①		
		3	00	2:30	落合地区、鹿塩川、駐在所上流から突入。神崎給市宅・中電住宅・大協建設飯場流失、駐在所・井沢茂衣宅流失寸前、浸水半壊家屋20戸余、役場の油倉庫流失①		
				3:00	西の宮下忠雄宅の裏山崩壊、生き埋めになった86の老婆、家族が救出。細沢晴男、元扇屋別宅も急流に没す①		
		5	00	4:00	大栗で近藤一男・近藤宮一家が裏山崩壊で全壊。松下廣海・近藤市一家は大萱沢氾濫で浸水、鹿塩川で浚われた松尾寿彦家は転落寸前①		
				5:00	北川地区、竹内とめ、小椋賢宅流失① 北川地区、北沢俊翁宅流失。小松市恵、宮下タカシ宅も土砂流入し危険状態①		

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	月日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和36	6月28日	朝方	北入二地区で黒川氾濫。治山宿舍、農協支所などへ侵入。高坂鹿男、望月政時2戸埋没。樽沢功宅倒壊寸前①		・青木の岩本じゅんちゃんの家、全部流された。それでうちに来ていた。(I・S) ・飼牛が流されたが、川原で生きていた。(I・S) ・牛は生きていたが絞殺した。(I・J)
		?	?	北入分校に鹿塩川本流浸水。付近の家屋、岸が浚われ断崖上となり危険①	県警機動隊、大鹿村派遣決定③	
		?	?	入沢井、随所に地割れ。河原島橋を濁流越え、附近危険①		
		?	?	青木で上唐沢氾濫。井沢茂男・農見ちよ・岩本二郎・岩村貞夫・井上一夫の5戸流失、木下良明宅埋没①		
		8:00		出張中の大鹿村長、飯田建設事務所担当技師外4名、徒歩で大鹿村へ向け出発。18時間後役場到着④	役場吏員米沢雄二、古川、木下、竹上、被災状況を伝えるため出発。12時間で豊丘村役場に着く①③	
		14:00		交通、通信全く途絶④	自衛隊先発隊入飯④	
		23:00			大鹿村に災害救助法発動③	(夕方～夜) ・避難しろと言われ、文満の松平のお宮(岩の上、高台に立つ)に避難していた。(I・S) ・旦那は前の晩、勤務先である郵便局に泊まっていた。(I・S) ・一晩中ガラガラいい、岩が落ち水しぶきが上がった。(I・S) ・上市場、郵便局当たりが危ないということだったので、局長と二人で…(様子を見に行った)(I・K) ・晩から良い天気。(T・S) ・天気が良かったので鹿塩に見舞いに行った。青年団で、お菓子とバナナを持って、役場の女の子と行った。(T・S)

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和36	6	29	3:00	塩原の新井邦男宅流失、地割れのため塩原の大半避難。北入の北沢好男・小島千頭両家、地すべりの危険で避難①		
			朝		雨、一時小やみ、日常生活に戻る①		<ul style="list-style-type: none"> ・ 天気が良くなり、日が昇っていたので、家に帰り洗濯などしていた。(I・S) ・ 旦那が郵便局から帰ってきた。(I・S) ・ 旦那に子を預け燃料を買いに農協へ行った。(I・S) ・ 大西山が落ちるとは誰も思っていなかった。川に水が出るといって、避難した。(I・S) ・ 家に荷物を運んで一休みしていた。今井さんたちも国道端にいた。(T・S)
				8:00	新田兼松宅鹿塩川に土台近くを浚われる。流失寸前裏山が崩落、鹿塩川を10分間堰き止め助かった①		
				8:30	大西山で小規模な崩壊。崖が動き大きな石が崩れる	建設省の職員2名小渋川まで見に行く(崩壊の爆風で死亡)②	<ul style="list-style-type: none"> ・ 崩れ、1回目の時は大丈夫と思っていた。(I・S) ・ あそこ(大西山)は2回落ちたからね。落ちて、また次が落ちた。この前で見えた。(O.T) ・ 旦那は私が帰ったら郵便局へ行こうと着替えていた。(I・S) ・ いつも雨が降ると沢に水が落ちていたが、落ちてこなくなった。(I・S) ・ 上の岩が落ちる前に、水がびたっと止まったのが見えた。(I・S)
				崩壊前			<ul style="list-style-type: none"> ・ 前面の山がぐらぐら動いた。下から50m位で1回落ちた。(T・S)
				9:10	大音響と共に大西山山平ナギ地籍が大崩壊、小渋川の濁流と合わせ山津波となる① 家屋全壊流失39戸④ 厚さ15m、幅500mの山塊は高さ450mから落下、同時に風を呼んだ③		

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和 36	6	29		土砂が崩れて水が上がって来た(1・S)		<ul style="list-style-type: none"> ・大西山全体が揺れて細かい砂利(でも大きな岩)になって、こらえられなくなって落ちた。(T・S) ・山がこけているように見えた。津波になるまで見ていた。(T・S) ・全部の山が動いて腰砕けになって落ちた。下に小渋川、田んぼにも水、津波になった。(T・S) ・農協から戻る途中、40×40の土砂の山が落ちてきた。その前に1回落ちている。(T・S) ・山が前に倒れてくるように見えた。2歳と2年生の子を抱いて飛び出した。(1・K) ・着替えをしようと思ったら、ガラス戸から山が落ちるのが見えた。(1・K) ・窓ガラスから崩れが見える。(1・K) ・崩落の時家において、お茶を飲んでいた。その時間、起きていた人はみんな崩落を見ている。(T・S) ・弟と崩れを見過ぎた。もっと早く逃げれば、もっと人を助けられた。(T・S) ・「大西山が来るぞ」と声をかけたとき、聞いた人は山の反対を見た。何処だと言っていると土砂が来た。(T・S) ・大西山が動いたと思ったら堤防を駆け下る二人を土砂が追いかけてきて、被さったのを見た。(T・S) ・土砂が落ちたため、滑った先に川の水を押し出して津波になる。2～3mの堤防より高く津波が見える。津波の高さ4～5m、最終的に7～8m。(T・S)

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和 36	6	29				<ul style="list-style-type: none"> ・水を含んだ土砂が対岸線まで堰き止めて滑るスピードは凄い。(T・S) ・音は地鳴りの大きい、ゴーンという感じの重い音。(T・S) ・崩れは、そのとき外を見ていないと分からない。(T・S) い。助かった人は、最初から外を見ていた。(T・S) ・石油を背負っていた。村会議員の人が議会に向 け歩いていった。手を挙げ、前田さんぞうさんが逃 げろと飛んできた。(I・S) ・崩れた時間は議員が議会へ向かう時間だった。 亡くなった方もいる。(T・S) ・議会の人が逃げると叫んだのが聞こえ、とっさ に東に逃げようと思った。(I・S) ・村会議員に逃げろと言われて逃げた。途中田ん ぼに飛び込んだ。(I・S) ・落ちる瞬間から子供を抱いて逃げる準備をし た。そうじゃなきゃ助からなかった。(I・K) ・家の中にいた子供を抱え、外で遊んでいた子供 に逃げろと叫び、国道に上がり、無事。(I・K) ・一度に来たから凄く勢いだった。今の国土交通 (建設)省の出張所で振り返ったら、家が吹っ飛 ぶのが見えた。(I・K) ・逃げろ一と言って、子供がまだ小さかったので、 連れてそっちへ逃げたけど、大変だった。(O・T) ・田んぼに入って逃げた。(I・S) ・長靴を捨て、蝙蝠傘を捨て、逃げた。(I・S)

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	月日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和36	6	29			<p>・腰まで泥をかぶり、逃げる途中で長靴、石油を捨てた。蝙蝠傘は借り物だったので、最後まで持ってたが捨てた。(I・S)</p> <p>・下駄を履いて逃げられた。(I・K)</p> <p>・夢中で裸足で逃げた。(I・S)</p> <p>・家が無くなったら持っていたも仕方ないと燃料の缶も捨てた。(I・S)</p> <p>・人はイザとなったとき、容姿は関係ない。がちりした体が大事。(I・S)</p> <p>・さらに東へ逃げた。(I・S)</p> <p>・家を出るときは山に逃げようと思った。学校が見えたから、上に逃げたらしいと思った。助かった。(I・K)</p> <p>・必死で逃げて、2年生の子は私ほど飛べないから、駄目だと思った。ふっと上で横を見たら付いていたから、助かったと思った。(I・K)</p> <p>・道や田の先に山と川があり、距離もあったので、こちまで来るとは思わなかった。(I・S)</p> <p>・波が来てもう駄目と思った時、田んぼの畔に着き段に上がり、そこで水が止まった。(I・S)</p> <p>・田んぼは段々になっていて腰まで水が来て、畦にはい上がった。裸足で泥だらけだった。寺坂へ行ったら旦那が先に見て見ている。(I・S)</p> <p>・旦那と子供に高台で会う。(I・S) (同じ集落の7、8軒のうち、今井漬さんの家族を除いて、けがも何もなかったのは5人だけ。)</p>

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和36	6	29			<ul style="list-style-type: none"> ・どの家もけ人がいた中、うちの家族だけ全員無事だった。自分の家族だけ無事で申し訳なく思った。(I・S) ・うちの集落でみんな無事だったのは今井家だけ、一番ひどい集落だった。(I・S) ・義理の妹が建設省に勤めていて、建物が流れてしまった。(I・S) ・今井積さんの妹ヨウコさんは、今井邦康さんが最初に思った方に逃げたので、泥に呑み込まれた。国道沿いに逃げた人は助かった。(T・S) ・妹はタイヤの下敷きになって亡くなっていた。(I・S) ・紐は大丈夫だけど、ゴムは全部脱げる。ヨウコさんはズボンをはいてバンドをしていたのできちんとしていた。(I・S) ・隣の人はパンツも、ずててこもみんなゴム。だから泥に流され裸だった。(I・S) ・周りの人は泥をかぶり、顔の見分けが付かない。(I・S) ・波の力でゴムのズボンは全部脱げ、裸で助けを求めていた。決死隊で大回りして対岸に行き、負ぶって救出した人もいた。(I・S) ・工事用のトラックが爆風で向こう岸まで飛ばされ、タイヤが土で埋まっていた。(I・S) ・家が何回目かの波で流された。逃げられず、けがしたり、亡くなった人は沢山いる。(I・S) ・牧島さんの家に教頭先生の原さんがいて亡くなった。(T・S)

西暦	和暦	月日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和 36	6 29				<ul style="list-style-type: none"> ・大河原で被災した家では、みんな亡くなっている。(T・S) ・瓢箪池で山崎のおばさんが屋根にはさまれ動けないのを見たが、助ける余裕はなかった。(T・S) ・農協前の私の中には災害の跡が今でも残っている。大きな穴が空き、多少泥水が入った。(T・S) ・土砂が流れた突端は松平神社(一番低いところ)で切れた。(T・S) ・土砂に流され対岸に追いやられた人が、引き水で元の岸に戻っていた。(I・S)
			9:30	大西山の崩土で出来た堰が切れ(天然ダムの決壊)、濁流は人、家屋、家財を飲み込んだ①人命42人、家屋40戸、美田30町歩が消えた。高さ48m、底500×600m 鋸山出現③		<ul style="list-style-type: none"> ・大西山の崩壊で天然ダムが出来、2時間ほど貯水した。その間に助けられた人もいる。堰堤が切れて、人、牛、家全部一緒に流れた。(T・S) ・農協の倉庫の裏に味噌を造る倉庫があって、そこなら安心と思っていた。そこにいた人は水が倉庫をまわり、土砂が来て一番多く死んだ。(T・S) ・(天然ダムの決壊で流れた人で)一番遠いのは、平岡ダムで発見された。水が引いたとき、道の中州から出てきた人もいた。(I・S) ・下にもう1軒、倉庫にしてますけどその裏が水にやられた。川を塞いだのでちょっと水がたまつて、途中で切れたから良かったけれど。(O.T) ・やはり蔵は強かった。鉄筋もつよい。(T・S) ・体育館があつてかなり助かった。(T・S) ・流された人達は中州に取り残され、消防団が昼間から決死隊を組んで救助にいった。(T・S)。
			10:00	災害対策のため村議会招集中、通行中の篠元村議大西山崩壊で被災③	大災害に鑑み大河原、鹿塩に分室設置。分室長に前田議長、古島副議長③	
			13:20		片桐・大久保・湯沢・水谷・気賀沢の5名、日赤救護団に救援を求めるため飯田市へ出発③	
			14:00		大鹿村長より非常電報「医療物資、至急救援たのむ」	

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和 36	6	29	14:00		<ul style="list-style-type: none"> ・けがをした人は神社から寺へ、戸板にのせて運んだ。水が引けた頃から消防も動き出した。(T・S) ・病院の先生の官舎があり、先生は被災者がみんないない寺に行ってくれた。薬を落合まで取りに行った。落合の人は山の崩壊を知らない。土砂が来るかも知れない、逃げてくれと言ってきた。(T・S)
			16:00		<p>県警機動隊、飯田市を出発。松川町を夜半出発、途中一泊、30日13時大鹿村着。途中調査結果を伝書鳩で報告③ 上記通信は後日、自衛隊の応急道路決定に大いに役立つ③</p>	
			20:00		<p>大鹿より必死の伝令、12時間歩き通し到着。「医薬品、衣料、食物、至急頼む」④ 自衛隊隊本3尉ら8名、100kgの医療品を背負って落合地区まで到着④</p>	
			30		<p>大鹿村、道路復旧工事に着手。北入消防団が食糧を持ち、山(キャンブ)に避難している人々を救助①</p> <p>各種復旧工事に着手。道路の開通、河川に聖牛457基設置、応急仮設住宅70戸、公営住宅33戸など③</p> <p>NHK、朝日新聞のヘリコプター飛来、災害状況を報道③</p> <p>救援航空隊ヘリコプター12機飯田に到着。物資輸送、日赤救護班出動④</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・清水の集落の集会场へ避難した。(4、5日間いた) (I・S) ・子供を連れて避難した。(I・S) ・行きがけの家で子供には靴を私にはもんぺをくれた。そこで世話になることになった。米のない所でおにぎり、じゃがいもなど、お返しも出来ないのいろいろ出してくれた。(I・S) ・貧しい集落の人達だったが、道が塞がり自分のちの食べ物もままならない筈なのに、持ち寄りで、麦粉に大切な砂糖を混ぜたものや、おやき、馬鈴薯をふかして味噌を塗ったものなどを分けてくれた。困っている人には優しくしてくれては……。(I・S)

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和 36	6	30			【山畑に じゃがいもあれば 来て住めと えにし持たねど 人ら優しき】 【一袋の 鮎いだきで 涙しぬ 吾かって 人に優しかりしか】(I・S) ・黒部から伊豆スカイラインの工事に出張中、十国峠で36災害をカラーテレビでみた。(N・I)
			13:35		県警機動隊到着、消防団と協力して死体処理③	
			14:50		自衛隊レインジャー部隊到着。上記と同じ③	
			15:15		地方事務所よりヘリ7機派遣。着陸地点、緊急輸送の+G108準備を要請する無電連絡③	
		7	1		この日から救護班、ジャーナリスト、関係要人の現地視察の来訪しきり。救援物資、松川基地より到着③ 救援航空隊ヘリコプター12機、米軍ヘリコプター6機到着、物資輸送本格的に開始。14日までに74吨の物資を大鹿村に空輸④	・大西山の落ち方がおかしいと、いろいろな先生が見に来ていたが、やはりその落ち方しかないと言っていた。(T・S)
			2		笠原副知事来村、村長救援について陳情③ 孤立地帯への救援、患者・生籾の輸送。村会を開催、救援対策を決める③	
			3		落合一大河原間、釜沢に至る道路開通③	
			5		落合一鹿塩学校間道路開通③	
			10		大河原一深ヶ沢間道路開通③	・籾(大切な収入源)は何日もおけないから、ヘリコプターで運んだ。(・S) (被災後の生活の様子) ・天のもりに逃げた。トラックによる配給もなくなり、いろいろなものが無くなった。山べだから
			13	14:00	文満前現場で大河原被災者大会開く③	

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和 36	7	13				<ul style="list-style-type: none"> ・ 麦豆など作り、慎ましい生活をしていた。(I・S) ・ 麦を炒って砂糖を入れ、食籠(じきろう)に一杯持ってきてくれたので食べた。(I・S) ・ 救援物資もへりも来ない。何もなし。(I・S) ・ 中学校土出しの時、岩本純一さんは生徒会長だった。(I・S) ・ 父母兄皆で中学校の砂だし。(I・S) ・ 中学校のグラウンドの土泥を向こうの川沿いに出した。(T・S) ・ 中学生は130人くらい。その30%なので、高校生は50人ほどいた。飯田市に下宿して、故郷を想いながら勉強していた。下伊那農業高校、飯田高校、飯田風越高校、飯田長姫高校の4校。(M・H) ・ 現在住んでいる家に3日間、缶詰にされた。その後は役場のお手伝い。被災地見回り、今後の危険箇所の対策を行った。(M・H)
			14		松川中学校において自衛隊解散式④		
			17		鹿塩中学校授業再開④		
			18	10:00	大河原小学校授業再開④	鹿塩小学校体育館で罹災者大会開く③	
			20		大河原中学校授業再開④		
			22			西沢県知事来村、村長復興について陳情③	
			24		鹿塩小学校授業再開④		
			25		落合まで小型車通行可能となる④		
			27		落合一岩洞間道路開通③		
			30			村議会復興対策を協議、小委員会で作成③	
		8	3			臨時村会、建設省の小渋川総合開発の件④	(被災後の生活の様子2)
			6			8月8日まで建設省災害査定③ 災害復旧鹿塩川筋間組、青木川筋大豊建設③	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高台に仮設住宅建設、仮設住宅に住む。(I・S) ・ 農協の倉庫以外すべて解体したので、土壁だけが残っている。(T・S) ・ 松平の林の杉の下に土砂が張り付いた跡がある。(T・S)
			12	10:30	仮設住宅、大河原16戸・鹿塩4戸完成③	大河原中学校体育館において水害犠牲者55名合同葬③	
			17			18日まで文部省災害査定③	
			31		仮設住宅、大河原10戸・鹿塩2戸完成③		
		9	6		保育園再開(6月27日から休園)。鹿塩地区、中央、梨原の外、北入二と北川の2ヶ所に臨時開園③		
			15		仮設住宅の残り34戸完成③		

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1961	昭和 36	11	16			<p>16～19日 青年団幹部10名、災害先進地（山梨県武川村、静岡県函南村、水窪町）視察③</p>	<p>(被災後、河川改修工事の間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会社（間組）から鹿塩まで行けと指示を受ける。25tブルをトレーラーに積み、伊那北からは自走、高遠の橋はクレーンで吊って北川を通り、鹿塩へ。(N・I) ・北川は川の中を来た。川の中は水が流れてても通れる。(N・I) ・大変な災害だと思った。自分たちも建設会社で黒部みたいな所にいるけれど、災害であんな所へ来たのは初めてだった。村の人も我々が来てから変わったな。長くしてくれたし。(N・I) ・日本に何台もない重機、佐久間ダムから黒部に行き、黒部から来た。間はそういうでかい機械を持っていたから、今でいう日野の15トン、その頃12台くらい来ていたか。(N・I) ・はじめは下原の元村長さんのところの橋のたもとから川と道をつ造った。この辺は何もない河原の状態、雨が降るたびに流れが変わった。(N・I) ・9月最初に台風が来てまだ深く掘ってないうちに水が出たんだ。落合の辺の鍛冶屋さんの家が流れるというんで、消防が招集されて、石枠を組むんだけど組めない。(N・I) ・ブルが要請され俺が行った。流れがひどくて消防は寄れないので、川の中にブルを入れてそれを盾にして石枠を組んだ事もあった。(N・I) ・新しい川を決めるとき議論も何も無い。(T・S) ・川は松平まで移動、昔なら山側に追う。(T・S)

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
							<p>・困ったことはそんなに無い。地元の人が間組に入って手伝ってくれた。重機の見習いなどで、すぐに親しくなったのは嬉しかった。</p> <p>俺の所についてくれた人が今でも何人もいる。(N・I)</p> <p>・女の人も働いていた、石積みを目地塗りとか、大島駅から運ばれた袋入りセメントを、切って使いやすいようにするとか。(N・I)</p> <p>・川の工事中雨があってもある程度流してあるから、そんなに心配しなかった。せつかく掘った基礎や重機などが埋まったことは何回かあるけどね。(N・I)</p> <p>・その頃大鹿には建設業者は無かったようだ。その後砂防ダムを造るのに大手がかなり入り入った。その下請けをしながら大きくなった。(N・I)</p> <p>・大河原の田んぼと青木の田んぼは全部大西山の崩れたのを持ってきて、盛土して作った。(N・I)</p> <p>・土木が盛んになったのは36年の工事後。大きな重機がたくさん入った。当時としてもかなり大きな重機だった。間組、大豊建設。(M・H)</p> <p>・重機が入ったら、住民の間に「これは何とかかなるぞ」という想い、気持ちが出てきた。(M・H)</p> <p>土木で就労することが可能となり、水田がやられていてもお金の収入が得られるようになった。(M・H)</p> <p>・トラクター、耕耘機、村で購入。→JAへ移行していく。(M・H)</p>

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1962	昭和 37	2				<p>駒ヶ根市、中川村、長谷村、大鹿村、豊丘村の1市4村で、集団移住者協議会を結成。</p>	<p>・大鹿村が今後どうするか、その施策をがんばったのは、県建設事務所土地改良課、農政課等。(M・H)</p> <p>・川の砂を出すのに何年も掛かった。(T・S)</p> <p>・災害後は工場を建てたり、山林もやって、仮設も建てたが流されたりした。堤防もない所で流れに任せていたので。(T・S)</p> <p>集団移住事業</p> <p>移住先 →愛知県瀬戸市…北入の方が主に移住した。開拓した土地は住宅地として売れた。</p> <p>松川町 駒ヶ根市…北川の方々が主で、一番多く移住した。全体の半分くらい。大徳原という土地（広域農道沿い）。今ではきれいな住宅地。</p> <p>伊那市 移住した地区 移住は集団で。でも行く先はバラバラ。</p> <p>→北川 … メインで当時60戸ほど 北入（北川の下流） 奥沢井（塩川の上流） 中山（滝沢の上流） 計80戸くらい集団移住した。(M・H)</p> <p>・当面は民生安定をメインで力を入れていた。(M・H)</p>

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1962	昭和 37	2					<ul style="list-style-type: none"> ・移住せず残る住民へは田んぼ（水田）の整備。個人の田んぼの石出しは大変。みんなで力を合わせて行った。“もっこ”ががんばった。一輪車があればよかったが、まだあまりなかった。(M・H)
		3	7				(土地改良の状況、村の状況)
		4	15			島河原の排土工事、4000万円の間組落札③ 小渋川総合開発に関する第一次要望書提出③	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事は田んぼを造ったり整地をしたり、田んぼも最初は盛土をしないでいいけない、と。盛土して田んぼの形になるまではかなりの時間がかか
		6	18			左の要望書の回答7月上旬③ 要望書についての懇談会③	<ul style="list-style-type: none"> ・田んぼの形になるまではかなりの時間がかか ・田んぼの仕事は土地改良です。でもああいう災害だし、同じ重機でやった。(N・I) ・大量の土砂をどうするか。土捨て場がない。 →田畑少なくなるが、ならして整地して埋めた。 盛土した地区……“道垣外（どうがいと）”地区。盛土して田んぼにした……大西公園の近く “島河原”。土地を田に変えるため、耕土なども入れた。耕土は村内、中川村、松川町から持ってきた。(M・H) ・あの頃は賑やかで、パチンコ屋も飲み屋もあった。300人以上の人がいた。重機の技術屋、測量などトロボ屋、電気屋と分かれていたけど、重機を運転する人が一番多かった。(N・I) ・災害当時ここに来ていた人達は、ある程度年輩者もいたし、若い衆が多かったからね、そりゃー生懸命だった。昼夜交代で1週間交代くらいでや

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1962	昭和 37	6					<p>・24時間は38年頃までやった。向こうでは38年まで運搬してダンプが動くということで。夜も昼もダンプを使ったということだ。(N・I)</p> <p>・金稼ぎに来た人だっていらないとはいえんけどな。ここに来れば仕事があるってんで。でもみんな一生懸命だった。(N・I)</p>
			29	9:00	落合慰霊碑前で大鹿村主催55名の災害一周年慰霊祭③		
		7	26				
		8	19		建設省より小笠ダム損失補償基準を提示③ 大河原地区間で「明るくい村づくり」研究集会。 集会は公民館が青年団、婦人会と提携③		
1963	昭和 38	2			大鹿村北川集落の38戸が全戸移住⑤		<p>・同じ集落の人はみんな出ていってしまっただ。(I・S)</p> <p>・移住先には農業開拓で入った。(M・H)</p> <p>・大鹿は恐怖感があった嫌だと思ったが、ずるずる残ってしまった。(T・S)</p> <p>・今でも雨の時、崩れる。ガラガラ音がして眠れない。昔と同じ気持ちになる。(T・S)</p>
1964	昭和 39	9			飯田市で伊那谷3市2郡共催の36災復興感謝祭と合同慰霊祭が行われる⑤		<p>・安曇野へ行く。(N・I)</p> <p>・小谷村・姫川で災害。支川浦川の土砂が姫川を塞ぎ、大糸線が埋没する。小谷の旅館に泊まり、その災害復旧に従事する。(N・I)</p> <p>・大鹿で結婚して後、小谷へ行く。結婚式のため、両親を呼んだら岩洞を通ったことでびっくり。村に来て「えらい所だね」と言われた。(N・I)</p>

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1967	昭和 42					<p>・その頃から現場を持てるようになって、車を買って、月に一度くらい帰ってきた。(N・I)</p> <p>(昭和42年頃、それ以降)</p> <p>・サクラは(昭和)42年のとき、最初は私一人だけで買った。(O.T)</p> <p>・(大西)山はガラガラだったから大林建材に頼んでブルで少し直して。みんな金を払ってます。(O.T)</p> <p>・上の平らな観音様のあたりは、全部最初に植えたところです。(O.T)</p> <p>・建材屋から砂を買い、下の中川村からは赤土を買った。苗木も買って、全部で280万円くらい。当時は60万円あれば家が1軒建った。これだけの金をどこから出したんだと、今受け取りを見るとびっくりする。(O.T)</p> <p>・俺は供養のためにやるんだ、死んだと思えばなんでもない。(O.T)</p> <p>・(桜の)苗木は最初は200本くらい、全部で2000本くらい自分で植えた。(O.T)</p> <p>・桜の根は30 cmを這う。200年経っても根は1mの深さしか入っていかない。それで土を30cm入れて、100何本かを植え始めた。(O.T)</p> <p>・夏場は軽トラツクに桶を二つ積んで午前2時頃まで水やりに行っていた。1日で全部やれないから年中繰り返し返さないといけない。(O.T)</p> <p>・研究して、日本で初めて雪の植え方を自分で発見するまでは、100本植えて4本か5本しかつかなかった。苗木は3月雪の降るうちに植える。雪</p>

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1967	昭和 42						の水が補給してくれる。それが分かる前は、植える時期を間違えていた。苗木の大きさは1 m50くらい、それくらいはないとつかない。(O.T) ・大鹿で機械の修理屋をしていた。(N・I)
1970	昭和 45				小渋ダム完成。大鹿村桶谷地区水没⑤		・大栗というところで災害があって、3ヶ月来てから、長野県の上水道用裾花ダムに何年かいて、(昭和) 44、45年ぐらいに大鹿へ。(N・I) (昭和47年頃) ・中央道が始まり元の重機屋にもどった。最初の山づくりをしてから砕石場に15年、大鹿砕石の石は全部中央道。それから大協。(N・I) ・道路整備され、地元の人も雇用されて現金収入があったって生活が潤ってきた。 ＝住民も定着してきた。現金収入を得られるとはいえ、子供を育てるといことは大変。そのお金の工面・・・資産売却をしたり、苦労をしたのだと思う。(M・H)
1972	昭和 47						・さくらの植え方について論文を書き、日本さくらの会に提出、表彰状をもらう。(O.T)
1973	昭和 48						(大西山崩壊地の植樹について) ・慰めるため公園にした。(I・S) ・大西にはまだ埋まったままの人がいる。(I・S) ・広場になってから、みんなが家から木を持ってきて植えた。(I・S) ・うちから堆肥など一輪車に乗せ、好きなどに植えた。大鹿の植物は全部ある。最初に植えた人は、慰霊の気持ちで植えた。(I・S)
1975	昭和 50	5			大西山崩壊地でサクラの植樹祭⑤		

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	月日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
1975	昭和 50					<ul style="list-style-type: none"> ・公園には知り合いや肉親がいるという思いに駆られて持ち寄った。(I・S) ・お金は全部寄付で。(I・S) ・土砂ゴロゴロでは悲しいから緑にした。(I・S) ・でも、歴史だから残したい部分もある。(I・S) ・村役場も桜の観光名所にと力を入れ始めた。(I・S) ・観音様の労力、費用主に寄付。(I・S) ・大西公園に気持ちりが吸い付けられ、忘れられない。(I・S)
1983	昭和 58					<ul style="list-style-type: none"> ・(昭和)58年まで(桜の植樹)一人でやっていた。今井さんが郵便局を辞めてくれて、同級生だから手伝ってやろうと、初めて手伝ってくれて。(O.T) ・(昭和42年から)16年で1200本くらい植えた。きちがいと云われたが、人が何と言おうが気にかけてもしょうがない、供養と村の発展だと思って。(O.T) ・58年まで苗木も一人で買っていた、今は桜の会でもらってくるけど、珍しいのは買ってくる。最初の頃は草も生えていない、ガラガラの山だった。(O.T) ・58年になって自分が会を作った。サクラもいくらかでっかくなってきたから。平多隆寿さんが「真次ばかりに金を出させたら可哀想だ」と言つて、村に交渉してくれて。(O.T) ・会ができてから変わってきて、40万円ももらったから草刈りなにか人に頼めるようになった。漸く村でも黙っていらなくなかったのでないですか。(O.T)

西暦	和暦	現在	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
						<ul style="list-style-type: none"> ・日本さくらの会に、さくら配布の申請があると、評議委員が植樹現地に行って何本植えられるなど評価報告を作り、それを添え申請書を出す。それによってさくらを配る。(O.T) ・段々欲になって、中日新聞で20万円くれたから、サルスベリを植えた。桜ばかりじゃ寂しいかなと思って、紅白を混ぜて100本ばかり。(O.T) ・福田一衆議院議長に「大鹿にはこういう災害があつたけど、こうやって桜が見られるようになつたから、来ていただけますか」と言ったら、「お前の所はそういう所か」といって来てくれた。大鹿には3回も来てくれた。(O.T) ・評議委員は公用が年6回ぐらいある。無報酬だから大変です。(特典といえば) 会長は衆議院議長だから、公邸に入れるだけです。(O.T) ・家内も3年前に死んだけど、えらかったと思うよ。「お父さんが供養でやるならいいよ」というあきらめもあっただろう。(O.T) ・大鹿村さくらの会も広がって今年も10人ばかり入ってくれて。大鹿村の人ばかり。(O.T) ・日本さくらの会設立40周年で表彰をくれた。(O.T) ・防災的には、実はまだ固まっていない。崩れている斜面の中央に残っている緑が危険。鋼製柵の施設を整備しなければ。何か起きたらひとたまりもない。(M・H) ・復旧工事で大鹿に来て、ここに定着したのは外

巻末資料 1) ドキュメント「36災害大西山崩壊」

西暦	和暦	月	日	時	気象・災害の状況	行政機関・地域住民の対応	体験者談話・証言
	現在						<p>にもう一人いる。九州の男でいい男だった。同じような道を歩いてきたんだが、ついこの間亡くなった。(N・I)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うちには子供は3人いる。みんな結婚して、大鹿にはおらん。正月は賑やかだよ。小さな家に15人とか寝泊まりするからな。(N・I) ・正月の3日と盆の3日は、家が壊れるんじゃないかと思うほど賑やかだ。ちよんどの男の子ばかりだし。(N・I) ・何が良かったって、これだけになって良かったなという気はするけどな。最初に北川から入ってずっと思い出があるわけだ。(N・I) ・(一番頑張ったのは)自分たちじゃないな。仕事をしたのは外から来た土方の衆だろうけど、頑張ったといえれば、村民の衆が支えてくれたんじゃないかな。(N・I)

(巻末資料)

2) 参考資料一覧

参考文献

- ①「大災害からの記録」平成4年3月 下伊那郡大鹿村
- ②「伊那谷の土石流と災害」平成3年12月 飯田市美術博物館・伊那谷自然友の会
- ③「大鹿公民館報一館報おおしか」大鹿村公民館新聞部
36年 8/10 9/25 12/28
37年 3/26 10/1 12/25
38年 2/15 5/25 8/13 10/25
- ④「ふるさと蘇る」心かよう誇りのもてる村づくり—大鹿村勢要覧1982
- ⑤「続・濁流の子」1993年3月 天竜川上流工事事務所

(I・S) 今井 積さん

(I・K) 今井邦康さん

(T・S) 筒井清一さん

(N・I) 野牧 勲さん

(O・T) 小野貞次さん

(I・J) 岩本純一さん (大鹿村助役)

(M・H) 宮下寛夫さん

あ と が き

天竜川上流河川事務所長

三 上 幸 三

天竜川流域は、「日本の屋根」とも呼ばれる中央・南の両アルプスに源を発する急峻な地形、中央構造線をはじめとする多くの断層が走る脆弱な地質といった諸条件から土砂の生産・流出が盛んです。豪雨のたびに大規模な土砂流出に起因する災害が引き起こされ、今なお語り継がれる昭和36年災害では、伊那谷全体で死者・行方不明者130名という甚大な被害がもたらされました。なかでも、大鹿村を中心とする小渋川流域では6月27日を中心として中央構造線沿いに発生した土石流等により民家の流出・土砂埋塞が相次いだうえに、6月29日には大西山が大規模に崩壊し、42名の生命が一瞬に奪われました。

このような土砂災害から住民の生命・財産を保全すべく、また国土保全により地域の生活基盤を確保すべく砂防事業が直轄で開始されたのは昭和12年のことです。以来、砂防堰堤、床固工群等の砂防施設整備や地すべり対策が進められ、今日に至っています。施設整備の効果もあり近年では災害発生の頻度こそ少なくなっていますが、砂防施設の整備はまだまだ道半ばです。

地球温暖化の影響等も指摘される今日では、これまでの記録を遙か上回るような集中豪雨が突如発生し、地域に壊滅的な被害をもたらす事例が各地で報告されています。そのような災害報道のなかには、過去の災害時の教訓が活かされていない等の辛口のコメントが加えられるケースもあります。一方、昨今の経済至上主義とも呼べる社会情勢下にあって、砂防事業に代表される山間地で展開される土砂災害対策事業や国土保全事業について、直接的な事業効果が見えづらい等の事由により辛辣な批判をいただくケースもあります。

大災害から45年を経過した今日では、36災害を記憶に止める人々は数少なくなっており、今後の地域防災を考える上では、昭和36年災害及び災害以降の地域の復興状況に関する貴重な体験談を後世に着実に伝承することが強く求められています。今後襲ってくるであろう集中豪雨等の折に、いかにして自らの生命・財産への被害を最小限に止めるか、いかにして災害発生後の地域復興を速やかに進めるかとの視点に立って、災害と格闘した先人の英知を確実に残すべきとの思いから、当時の体験談を語って頂きました。ご協力頂いた方々に心より感謝申し上げるとともに、本冊子が災害を経験していない多くの方々にとっての、未知なる災害への備えとして役立てられることを強く願う次第であります。

なお、このインタビュー集はインタビュー内容を極力そのまま掲載しておりますので、国土交通省の見解とは異なる場合がありますことを付言させていただきます。



大鹿村大河原にある自我作古の碑

「自我作古」

我自ら昔を回想し、古い事例にとらわれることなく、独創によって新しい住みよい地域を、そして社会を開くことが必要である、ということ

36 災害45周年 体験者インタビュー集

大西山崩壊と大鹿村の復興

2006年6月 発行

企画・発行：国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所

編 集：特定非営利活動法人 砂防広報センター

印 刷：株式会社 宮澤印刷



36災害45周年 体験者インタビュー集

大西山崩壊と大鹿村の復興

「語りつく36災害」